小田実全集〔小説　第 11 巻〕

羽なければ

羽なければ

羽なければ、空をも飛ぶべからず。龍ならばや、雲にも乗らむ。

◆

また、ふもとに一の柴の菴あり。すなはち、この山守が居る所なり。かしこに小童あり。ときどき来たりてあひとぶらふ。若(もし)、つれづれなる時は、これを友として遊行す。

鴨長明『方丈記』

一

だいぶまえのことになりますけど、岡本が死にましてん。岡本いうたかて、胃ガンで死にはった東洋電器の会長はんのことやないでっせ、岡本喜三郎はんのことやったら新聞にも出てたし、そうでのうても有名人やからようけ知ってる人いはりまっしゃろ。お葬式にえらいさんがみんな車で駆けつけたよって大阪市内はえらい交通渋滞や。そないに夕刊に書いてありました。

わてが今言うてんのは、そんなえらい岡本はんのことやあらへん。わての昔の仲間の岡本勝七のことや。わてと岡本とは昔ずうっと大都造船でいっしょに働いて、終戦後、やっぱしあれは魔がさしたんですやろな、べつに二人で相談したわけでもしめしあわせたわけでもあらしまへんのやけど、もうこんな鍋や釜やお寺の釣鐘なんかつくってる工場なんかには見込みあらへん、それよかいっそ闇商売でも始めたらどうやというわけでやめてしもうた、そんな仲ですがな。そんなこと言うてみたところで、岡本のことなんか誰も知りはらへんやろ、これが何年もまえのことやったら、桃谷駅前に「ひばりや」いうちょっと大きなスーパー・マーケットがありますな、あそこの庶務主任してたいうことですさかい、そのころ死んでたら、お葬式にも「ひばりや」から若い男や女の子がようけ来てにぎやかなことやったろうけど、卒中で倒れてそのあともちろんお店もやめて一年寝たきりで最後の発作をおこして死によったいうんですから、そうはいかしません。それでも大きな花環だけは「ひばりや」の

社長はんから来ていたし、香典のほうも店員はんが一人百円あて集めはったのを会計の女の人がとどけに来はったりして、やっぱし、岡本は運の強い男や、いつでも得するようにできてるお人や、とあとで聞いてつくづく思いましてん。

あんな大きな花環が来たとこを見ると、岡本はほんまに主任はんでしたんやろな。ずいぶん見栄っぱりの強い男で、平気でウソもつきよったけど、あれはやっぱしほんとでしたんやろ。最後に会ったのは五年前で、わてが新世界の通天閣のま下にテント小舎みたいなストリップ劇場がありますな、あそこのまえで男と女がからみあってどこがどうなっているのかよう判らん看板見てボンヤリしてましたら、肩叩く人がいよる。ふり返ってみたらそれが岡本で、あとからひとりになって考えてみたら、岡本もわてと同じで、何ぞ家のなかでクソ面白うないことがあってあんなところまでひとりでフラフラ来よったんでっしゃろ、そやけど見え坊の岡本のことやから、そんなことはオクビにも出しよりません。景気のいい顔で、久しぶりや、どや、いっしょに飯でも食おか。わてもそう来ることは判ってましたから、先手をうって、あんさんがおごるんやで、なにしろ、あんさんはまだ現役や、現役のパリパリや。わてがそないに言うと、現役や、現役やてうまいこと言いはる、そんなこと言うたら、おたくかてまだ働いてるんやから現役やで、といつでも岡本は、口だけは不服そうに言いよるんやけど、そんなのは口先だけのことで、顔のほうはうれしそうに笑うてはるのや。アホくさ、学校の小使が現役やったら、世界中の老人はみんな現役や。わてがそないに言い返すと、ま、うるさいこと言わんと、いっちょ行きまひょ。それで早速「ふぐ助」へ行きましたんや。あのテレビの、凸凹コンビで「超格安ふぐ、ふぐ、ふぐ、ふぐはふぐでもふぐのふぐ助」いうけったいなコマーシャルやってはるのがあ

りますやろ、あれです、あそこへ行きましたんや。三百人入るいう大広間でてっさとてっちり食べましてな。岡本はモツ焼きもあぶってもろうて食べてはりましたけど、わてより三つ上で、もうそのときで六十五でっせ、よう入るもんですわ。あんなもん食べたよって卒中になったんとちがいますか。ガンがこわい、ガンがこわいいうて、そのときもあらかたそんな話で、サルノコシカケとか海亀の脂を全身にぬる療法とか、日本に来て吉田はんにむこうて再軍備せエ、再軍備せエ、言うて行きはったダレスいう人がいますな、その人がやっぱしガンにやられてたそうですが、そのダレスはんのこととか、岡本は昔からもの知りで通ってた男ですけど、まあ、びっくりするぐらいよう知ってますのや。わてに言わせると、あの人、ガンがこわいこわい言うてはったけど、ほんまは自分はガンにかからへん思うてはったんとちがうやろか。ほんまにこわいんやったら、あんなにわざわざ調べることもないし、一生懸命、しゃべりまくりはることもない。わてはほんまにガンがこわい。そやよって黙ってますのや。ガンの話するだけで、ガンがからだのなかのどこかにでけるような気になりますんや。それで、そのときも黙って、聞き役にまわってフン、フン言うてたんですけど、まあそのうちガンの話のタネもつきて、それからおきまりの家族の話ですわ。息子と娘と婿と嫁はんと孫の話——おたがいのつれあいの話は岡本もわてもどっちももうなくしてましたからしませんのですけど、だいたい、家族、身内の話となると、悪口でっしゃろ。まあ、グチの言いあい、聞きあいいうとこですな。そのグチの言いあい、聞きあいのなかにも、おたがいののろけ、自慢、見栄いうようなもんもたいがい入っているものですんやけど、そんなことここでわざわざ言うほどのこともありませんな。そのうち何気ない口調で、岡本が、今度庶務主任にしてもろたで、と言いよりました。あとから考えたんやけど、ほんま

はそのことをもっとはよう岡本は言いたかったんでしたんやろうな。もっとかんぐったら、「ふぐ助」へわてを連れて行ったんも、それ言いたかったんやからとちがいますやろか。「ふぐ助」いうところがなんぼ安いいうたかて、二人で食べたら千円は飛びます。そやよってそれぐらいの功徳はさしたげないかんと思うて、わても、そりゃよかったなア、辛抱のしがいがあったなア、とくり返して言ってあげたんですが、ほんま言うと、片方で、何や、「ひばりや」みたいな吹けば飛ぶような店の主任になっていばることないやないかと思いながら、ちょっとうらやましい気がしたのも事実で、わても岡本みたいに桃谷駅前の「江戸前にぎり十円ずし」に店の女子衆を入れ代り立ち代り連れて行きたいような気持になったんですがな。岡本は大都造船で工長になりはったけど、わては副工長どまりで主任はんみたいなもんになったことあらしません。

さっき岡本の葬式のこと言いましたけど、ほんまはわてはその葬式見てへんのです。一日日をまちがえて、葬式のあくる日、岡本の家へ行くいういかにもグツのわるいことになってしもうたんやけど、それは岡本あつ子がわてにそないに言うたからで、まったく岡本あつ子いう女、いや、女の子ははじめからわけの判らん変な女子でした。

岡本が死んだいうて知らせに来たんは岡本あつ子でしたんや。わては岡本の知り合いやいうても二年か三年に一度道でバッタリ出会うくらいの仲やったから、会えば家族、身内の自慢話、グチ話やらをしますけど、ほんま言うたら、岡本の奥さんには昔会うたことありますけど、子供や孫のことになると、名前は聞いていても知ってるのは一人もいません。それはおたがいさまで、岡本かってわての子供、孫に会うたことありませんやろけど、忘れもしません、まだ九月のはじめの暑い日の夕方、家

族でみんなしてテレビ見ていたら、玄関で何やら話声がして、誰ぞ来イはったんかと思うたら、孫の健志がけったいな顔してわてのとこに来て言いますんや。何や知らへんけど、白ブタみたいな女の子が来ておじいちゃんに会いたい言うとるねん。誰や？　誰や知らん。とにかく会いたい言うてきかへんねん。名前訊いたんか。岡本とかいうた。岡本あつ子。おじいちゃん、そんな女の子知っとるの？茂一と嫁の元子が健志よりもっとけったいな顔をしてわてを眺めるものやから、わてはしょうことなしに立ち上って玄関へ行きましたんですけど、そこには誰もいやしまへん。へんやなと思うて外へ出てみると、塀のきわのところに、セーラー服の女の子がしゃがんで泣いていますんや。どないしはったん、と訊くと、急に立ち上って、柏木のおじいちゃんですか、うちのおじいちゃんが今朝死にました、と舌足らずの甘えた声で言いよるんです。

あとで岡本あつ子に言わせたら、わてはえらく素気なく、あ、そうでっか、と言い、まるで岡本の死ぬのをまえまえから待ってたような口をきいたと言いよるんやけど、まさかそんなことはおまへん。ただ、この年になると、もう人が死ぬいうことに不感症になってるみたいなとこがありますな。もう慣れてますのんや。明日はわが身やないか、いちいち悲しんでいられるもんかいな、と岡本がいつか強がりで言うてましたけど、たしかにそんな気持がするときがある。そやけど、一方で、それこそ明日はわが身やありませんか、知り合いの死いうもんは若いときとちごうて、悲しいというよりもっとからだのシンにまでひびいて来る感じでこたえよる。それでかえって、そんな素気ない口のききかたになるのか判れしまへんのやけど、十六歳、高校二年生の女の子にそんなことの何が判りますか。もっとも岡本あつ子も岡本あつ子のほうで、わてが、おまえかてなんや甘えた声で、おじいちゃんは死に

ました、と言うたやないかと言い返すと、おじいちゃんは判ってへんな、うちの甘えた声は生まれつきでどうもならへんし、うちはほんまに悲しかったんや、と口をとがらせて怒って言いよりますねん。

その「あ、そうでっか」のあと、どれくらいの時間、わてと岡本あつ子は立話してましたやろう、五分とかからへんかったんとちがいますか、葬式の日どりのことなんかはいずれ正式に明日か明後日には通知のハガキがつきますけど、これこれの日どりと時間、場所は自宅、というぐあいに、こちらが感心してしまうぐらい岡本あつ子は手ぎわよう話して行きましたんやけど、その日どりが一日ちがっていましたんです。時間と場所は同じでしたんやけど、日どりが一日おくれ。

ハガキでもついていたらそないなことにならしまへんのやったけど、そのハガキが来ませんのや。岡本あつ子に、おまえんとこでちゃんとわてあてにハガキ出したんかとあとで問いつめると、出したで、つけへんのは郵便局がわるいんや、とこうですがな。わての想像では、岡本あつ子がわてあての通知のハガキをわざと抜きとってすててしまったような気もするのやけど、どうでっしゃろな。そんなこと言い出したら、岡本あつ子は、そんなにまでおじいちゃんはうちのことうたごうてはるんか、と言うて泣きじゃくり始めるのにきまっています。それでわてはいつも黙ってしまうのやけど、ほんまを言うと、そうとちがいますか。

おかげで、えらい恥かいてしもうた。岡本の長男、岡本あつ子の父親の定吉はんというのが喪主でしたけど、長男いうんはみんなあないになりますのやろか、うちの長男の茂一そっくりの不愛想でかた苦しい男で、今ごろ何しに来た、いうような眼でわてをじろじろ見よる。苦しみはりましたか、と訊ねてみても、そんなことあらしまへん、ポクリといきよりましたんや、ととりつく島もないですね

ん。早々に引き上げましたんやけど、お骨のおいてある横で赤ん坊がシキミの小枝を口にくわえて這うていたり、畳の上に香典袋や大丸の包紙が散らばっていたりするのはわてのうちそっくりで、まあ、一口に言うたら、岡本にとって決して住み心地よい家でなかったいうことでっしゃろな。小そうなって暮していたんとちがいますか。わてはうちでは玄関わきの三畳をもろうてそこがいちおう「おじいちゃんの部屋」ということになってますけど、それは茂一や元子に都合のええときだけそうなるだけのことで、要するに孫の遊び場ですがな。子供にだけオヤツやらないかんようになると、元子が、おじいちゃんの部屋やないの、みんなこっちへ来て、言うて号令かけますのや。

わては岡本の長男の気むずかしい顔見ているうちに、ふいに訊きとうなって、

「定吉はん、岡本はんの病室はどちらでしたんや。」

「病室いうて……」

定吉はんは、何や火星から来た人でも見るような眼でわてを見てから、ああ、と自分で自分にうなずいて、

「そんなんべつにありませんがな。みんないっしょにいましたんや。そのほうがさびしないですやろ。」

うまいこと言いよるなと思いました。さすがに頭のええ岡本の長男のことや、うちとこの茂一やったらそうはいきまへん、きっとヘマ答えよったと思います。柏木君は実直で真面目やけどバカ正直で困りますねん、という噂を、いつやったか、うちへ来た会社の同僚の人から聞いたことがありますねん。そんなことで、北浜のちっぽけな証券会社でもまだやっと係長になれたいうことですねんやろ。あとで知ったことやけど、定吉はんは薬品販売の会社の課長代理してはるいうことでした。あんまり名前

聞いたことのない会社で、そこの課長代理やからどちらにしても茂一とあんまり変らんパッとせん感じですけど、そのときはえらいやり手はんに見えたんですがな。

そやけどいくらうまいこと言いよるいうたかて、そんなふうにうまいこと言われて、病気になってもいっしょくたに住まされていた岡本の身になってみなはれ。いつやったか、うちではワサビくわしてくれへんねん言うてグチを言ってたことありました。子供が嫌いやし、毒になるいうて、岡本の家では、いや、あの定吉はんの家では、刺身食べるときかてワサビ抜きで食べはるいうことでっせ。岡本あつ子かて、おかげでワサビ抜きで刺身食べよるんやけど、わてにまでそないさせようと思うて大変でした。そうせんと泣き出しよるんですがな。からだにわるいよってワサビ抜いて食べて、うるさいほど言いよって、わてがきかへんなんだら、おじいちゃんのこと思うてこないに言うてんのに何や、と言うて泣きますんや。岡本は、うちではワサビ抜きで刺身食べさせられとったんで、そいで、あの人、あんなとっかえひっかえ「江戸前にぎり十円ずし」に「ひばりや」の女子(おなご)衆連れて行きはったんかも知れん。

とにかく定吉はんはとりつく島もあらしまへん。早々に引きあげることにしましたんやけど、気にかかるのは、岡本あつ子が日どりを一日ちがえて教えてくれたことで、わても少し腹を立てたもんですから、こないだお宅のお嬢さんが来イはって知らせてくれはったんやけど、と率直に苦情を言いましたんや。そしたら、定吉はんはまたたまげたような顔でわてをつくづくと見て、

「それ、ほんまでっか。うちのあつ子に柏木はんのとこへ行けいうて何も頼んだおぼえあらしまへんのやけど。」

第一、うちのあつ子をまえまえからご存知でしたんやろか、と定吉はんはキツネにつままれたような顔で、わてに訊き、わてはわてでびっくりして、こないだはじめて会いましたんやけど、と答える。そのうちそんな押し問答ではラチがあかんいうわけで、とうとう二階にいたあつ子を呼びまひょ、ということになったんやけど、それで余計ややこしいことになった。わては岡本あつ子がずうっと二階で耳をすましてわてらの話をぬすみぎきしていたにちがいないと思いますのやけど、とにかく、岡本は死ぬ二日か三日まえ、あの子がちょうどそばにいるときに急にことばが言えるようになって、わての住所と名前を言って、死んだらそこへまず連絡してくれ、おまえが直接行ってやってくれ、と頼まれたというんですな。

信じられん話ですわ。定吉はんも同じ思いやったらしく、

「その話、ほんまか。」

とくり返して訊ねはったんやけど、岡本あつ子はどないにくり返してみたところで、

「ほんまや。……ほんまやで。」

そんな押し問答をいつまで聞いていてもしょうないし、もうええかげんおそうもなって来たんで、わては、それでは今度初七日のときにまた寄せてもらいまっさ、とこんなときのキマリ文句を言ってその日はそのまま帰ってしまいましたんやけど、次の日、学校から帰って来ると、塀のきわのうすくらがりに立っている人がいますのや。誰かと思うたら岡本あつ子で、わてを見たら、ピョコンと頭を下げよる。そいから、こないだのやうな舌足らずの甘えた声で、

「おじいちゃん、お参りに来てもろうてどうもありがとうございました。」

いや、そのあとも、まだつづけて一人前も二人前ものことを言うんでっせ。

「昨日はおかまいもしませんで、失礼申し上げました。」

こうたてつづけに言われてしまうと、葬式の日どりが一日ちごうてたやないか、というセリフはどうしても二の次になりますな。それにしても、十六の子供相手に、このたびはゴシュウショウサマで、とか何とかしかつめらしい口上を述べたてるのもけったいな話やけど、しょうありません。先方さんがそないに言いはるのやよってと思うて、わてもそんな口きいてましたんや。いったいこの岡本あつ子という女子(おなご)は、はじめから年のわりにませていて(それとも、きょう日の女子(おなご)はみんなあんなふうなんでっしゃろか)、岡本が死んだいう知らせをもって来たときも、わてがお通夜のほうは遠慮させてもらいます、からだのぐあいもよろしないよって、と言うと、「ウン」と勝手にうなずいて、そうしなさったらよろし、お通夜なんてもんは柏木のおじいちゃんが知らん人がようけ来てお酒のみはるだけのことやさかい、と変にわての胸のうちを見すかしたようなことを言いますんや。はじめから妙になれなれしく柏木のおじいちゃんと言うてみたり、そうかと思うと大人ぶったよそ行きのことばを急に使い出したりして、ややこしいかぎりですわ。

まあそんなそれこそよそいきのやりとりをしているあいだにころあいを見はからったみたいに、岡本あつ子がまたけったいなこと言い出しよったんです。あつ子はいつでもそうなんやけど、ま、なんちゅうたらええか、要するに今のことばでいうたらタイミングちゅうもんがよろしますねんな、機嫌よう世間話なんかしてますやろ、こっちもそないな気になって相手してますと、突然、こっちの胸がとまってしまうようなことをぺろっと言い出しよるんです。

「あんなア、柏木のおじいちゃん、教えたげよか……」
いつでもそのセリフから始まって、それから本文や。それを少し声をおとして秘密めかして言いますねん。
「柏木のおじいちゃんには葬式のあと一日おくれて来てもらうように言いはってん。」
「……誰が言いはってん？」
「おじいちゃんやがな……うちとこの死んだおじいちゃん。」
そんなことだしぬけに言われたら誰かってびっくりしますやろ。わてが思わず、
「何でや。」
と言うと、もうそんなことをわてが訊ね返すいうことくらいあの子には判ってるんでっしゃろな、ふつうの子やったらわてがにらむと顔をそむけたりするもんですが岡本あつ子はそんなことしまへん、平気でわてをゆっくり見返して気をもたせるようにしてから、あっさり、
「知らん。」
と、こうや。
わてが拍子ぬけもし、何やら小娘にバカにされたような気になって黙っていると、岡本あつ子はやっぱし人の顔色見るのが上手な女子（おなご）ですな、岡本が死ぬ二、三日まえにわてにじかに知らせるように頼んだとき、そのこと——葬式の一日あとに来てもらうことも頼んでいたと、えらく神妙な声で言いよるんです。そればかりやあらしません、へんに分別くさい顔で、そのほうがなア、柏木のおじいちゃんにしんみりお参りしてもらえると思うたんかも知れまへんで、とつけ加えよるんですがな。

「ほんまにあんたはんのおじいちゃん、そないなこと言いはったんか。」
わては、ウソぬかしたら承知せエへんぞ、というふうな顔でにらみつけてやりましたんですが、あの子はそんなことやったって平気ですな、わてをまたまっ正面から見返して、いつもの甘えた口調ながらいやにハキハキした口ぶりで、
「ほんまや。」
「ほんまにほんまか。」
わてはもう一度訊いてやりましたんや。そしたら、また「ほんまや」と言い返すと思うたら、もうそないに言いよらしません。
「ほんまかウソか、どない思いはったって、柏木のおじいちゃんの自由やけどな。」
と、それこそ逆にウソついているのがわてみたいにこわい眼でまっすぐにわてをみつめよるんですがな。それからひょいと、これもまたわてをびっくりさせるようなことを言いよった。
「柏木のおじいちゃん、うちはおじいちゃん好きや。」
それだけ言うと、もうそれで言いたいことはみんな言うてしもうたいうような晴れ晴れした顔で、
「サイナラ、また来るわね。」
と言い残して、そのまま歩き出しよったんです。こっちは何にも言うことあらしまへんがな。それでも、
「サイナラ。」
と言ったあとで、あの子の口ぐせが移ってしもうたんでっしゃろな、
「また、来なはれ。」

とわては言うてしもうた。

二

それからですがな、三日に一度は岡本あつ子がわてのところへやって来るようになったんは。はじめは塀のきわのうすくらがりのなかにわての帰るのを立って待っていてそこで立話をしてたんですけど、肌寒うもなって来よるし、まるで高校生の密会みたいやしと思うて、わてのうちにあげてやることにしましたんやけど、そうなって来ると、元子や元子の子供、つまり、わての孫だんな、そんな連中が黙ってしまへんがな。かわいげのある女の子やったらまだええんやけど、岡本あつ子いうたら、肌色が白いだけがとりえみたいな、まったく白ブタみたいな女子（おなご）やし、わてといるといろんなこと話したり笑ったりしよるんですけど、ほかの人にむかうと、ブスッと黙っているか、ええ人にはええでっしゃろが、嫌いな人には神経を逆なでされるような気になる舌足らずの甘えた声で（うち、生まれつき舌が短かいんや、といつも言うてました）自分の言いたいことだけ言ってのけるというんやから、これはあんまり人に好かれへんのとちがいますか。もっとも、うちの元子や孫やったら、どんな人が来てもあきませんやろな。よしんば岡本あつ子がスターみたいにきれいな子やったらそれはそれで今年中学三年生になる一番目の孫の良子なんかヤキモチやいてうるさいことやろうし、ひょっとすると元子まで妬んでねちねち言いよるかも知れません。岡本あつ子は美人やなかったんでかえってよかったんかも知れませんな。それで、なんやあんな白ブタ、いうぐらいですんでますんや。

あれやこれやで、岡本あつ子はわての学校に来るようになりました。わてはまだおなさけでうちの

近くの私立女子高校の小使させてもろうてたんですけど、一週に二度、夜八時ごろまでいてあとは夜警の人にひきつぐ日がありますんや。岡本あつ子はまえもってそんなこと調べとったんとちがいますやろか。なんにも訊かへんのに現われるとなるときまってそのときで、なんやわてのことみんな調べてよるみたいで気味がわるうなりましたで。と言うたかて、いつでもわてひとりが小使室にいるのやおません。同僚がいたり、先生が遊びに来はったりしたんやけど、岡本あつ子は平気でした。同僚のほうでも、ずうっとわてのお孫さんやと思うてたそうやからのんきなものですわ。あの子が自分でそないに言いふらしてたらしいんですのやけど、まあ、わざわざ言わへんでも、十六の高校二年生とおじいちゃんのとりあわせではそう思わんほうがどうかしてまっしゃろ。もうそのころには、わてのことを「柏木のおじいちゃん」とは言うてませんでした。ただの「おじいちゃん」や。そないに言うとるもんやし、そこは、第一、女子高校ですやろ。若い女子(おなご)が学校へ来ても目立つところやあらしません。

そやけど、けったいな女の子やとみんな思うてましたんとちがうやろか。度肝ぬかれた、いうてはった人もいました。浜坂はんいう今年還暦になりはった人やったですけど、わてもそのときいっしょに小使室でテレビ見てましてん。岡本あつ子も黙って入って来て、わてと浜坂はんのうしろからテレビ見てましたんやけど、あの子はいつも黙って入って来てこちらがテレビ見てたらテレビ見る、新聞よんでたらそこらに散らばっている残りの新聞をよむ、しゃべっていたら仲間に入ってたいていは黙っているがふいに甘えた声でしゃべり出すというふうでしたから、べつに気にもとめんと放っておきましたのや。そしたら、突然、消して、このテレビ消して、なア、消してエな、とまるで泣きじゃくるようにして叫び始めたんです。はじめは何ごとがおこったのやろかと浜坂はんもわても呆然としてま

したんやけど、とにかく、テレビ消してくれいうんでっしゃろ、それで浜坂はんやったかわてやったか、スイッチに手のばして消しましたんや。

「どないしたんや。」

わてがやっと自分をとり戻してそないに訊くと、もうさすがに泣きじゃくるのはやめてましたけど、

「こわかったでエ、おじいちゃん。」

と、まだふるえが来るような顔でわてのからだにピッタリ身をよせて来て言いますのや。

「こわいて、何がこわいんや。」

あんまりフに落ちんことやよっていつもは黙ってはる浜坂はんがたまりかねたように横から口を出しはると、あの子は余計けったいなことを言いよる。

「三国ジュン子……あの人、こわい人やでエ。」

三国ジュン子いうたら、もちろん、あの流行歌手の三国ジュン子のことで、いつも和服を着て、日本調の歌うたいはるまだたしか二十(はたち)まえの娘さんや。あんまり歌はうまいことあらへんし、いつも和服ばかり着てるのはスタイルがわるうて大根足かくすためやと週刊誌に書いてありましたけど、わてにはこのごろのややこしい歌より三国ジュン子の歌のようなしっとり落ちついたのがよろし。スタイルかて、もっさりずん胴でふんわりとおいどのあたりがふくれているというようなんがかえって性にあってますねやろな。このごろの女の子みたいに、あっちこっち出ばったりひっこんだりして、手と足がいやに細うて長いいうのんは、やっぱし、明治生れのわてむきやおまへん。浜坂はんかて、その「歌のスター・パレード」という番組で、三国ジュン子が出て来たところでそれまで夕刊を見い見い見て

はったんをわざわざ姿勢をなおしてテレビにむきはったぐらいやから、わてと同じ意見の持主とちがいますか。ことばをつづけて、何でこわいねん、ととがめだてするようにふり返って言いはったんも浜坂はんでした。

そやけど、それでひるむような岡本あつ子ではあらしまへん。ふり返った浜坂はんをゆっくり見返してから、またけったいなことを言いよった。さっきからけったいな、けったいないうことばばかり使うてるみたいで気がひけるのやけど、事実やからしょうないですがな。

「三国ジュン子いうたらね、小鳥ようけ飼うてはるねん。」

インコ、セキセイインコ、カナリヤ、九官鳥、オーム、十姉妹……あとできいたら出たらめ並べてたそうやけど、岡本あつ子はいつもの舌足らずの甘えた声と口調に戻ってゆっくり言いよる。

「それがどないしてん。」

わてが思わず口を出すと、そんな簡単なことがどうして判りはれへんの、というようないらいらした顔つきになって、

「こないだ、テレビのインタビューに出てはってん、そこで小鳥のこと話しはって……」

要するに、ある日、三国ジュン子がソファーに坐ると、下にカナリヤがいて、下敷きになってあえなくオダブツになったいうんですな。

生き物飼っていやなのは死ぬことですわ、というようなことから話が始まったらしいです。愛らしさが売り物の三国ジュン子のことやから、小首でもかしげて、死ぬのはほんとにイヤ、というたんとちがいますやろか。岡本あつ子いうんはなかなか演技力がある子やさかい、泣きながらでもそんな真

似してみせましたんやけど、そのときだけ、白ブタの岡本あつ子が色が白いということだけでも共通しとるさかい色白美人の三国ジュン子に見えたんやから、やっぱし芸の力ですわ。三国ジュン子がそないに言うたら、インタビューする人は無責任なもんですわ、心がおやさしいんですね、というような歯の浮くようなセリフを言いよったらしい。そいで、三国ジュン子が自分のおいどでカナリヤを圧しつぶしたという話をしたんでっしゃろ。

きいているうちにはじめはアホらしい気がして来て、そんなこと何がこわいねん、わてなんか、クレーンの運転の失敗で何十トンいうような鋼材の下敷きになった人見たことあるで、戦争中、直撃弾くろうて脳ミソやら内臓やらとび出した死体をあっちこっちで見たことがあるで、と言うたろう思いましたんや。そやけど、これもまたけったいな話で恐縮ですけど、カナリヤの話、聞いているうちにだんだん気色がわるうなりましてな。こわいというのやあらへんけど、まあ気色がわるいいうんでしょうな、あの三国ジュン子のおいどがカナリヤを圧しつぶしたと思うたら、ええ気持せエへん。

「なきよらへんかったんやろか。」

「ないても聞こえへんやったんやろ。きっと三国はん、坐ったままで『夜雨（よさめ）の京極河原町』を歌うてはったんやで。そいで、聞こえへんかった。」

「……」

「そんなことようあるんとちがう、おじいちゃん。」

そう言いきってしもうてから、岡本あつ子は子供のとき映画館で迷い子になったときのことを長々と話しよったんやけど、まあ、よくある話でんな、親のほうは子供のありかを知ってたんやけど子供

のほうは迷い子になった、えらいこっちゃと泣きじゃくる。もっとも、岡本あつ子は自分でこういうときには泣きじゃくれば親切な人が必ず出て来るにちがいないと考えてわざわざ泣いてみせた、そやけど、誰もかもうてくれへんので今度はほんまに悲しうなって泣きじゃくったいうんですが、あの子やったらそうでっしゃろな。

「なんぼ泣いたかて、誰もふりむきもしてくれへんねん。映画が西部劇でなア、大きな音たてて射ち合いしとるねん。」

「そいで、どないしてん？」

「どないもこないもあらへん。映画が終って明るうなるまでそないして泣いていた。」

明るうなってみたら、両親も兄弟も、みんなつい近くに立っていたというんでっせ。

「薄情な話や、誰もうちの泣き声聞いてくれへんかってん。悲しかったし、こわかった。」

「……」

「うちなア、そんなとき、世界中でただひとり取り残されたみたいな気がするんや。」

「……」

「うちなア、おじいちゃんが死にはるときなア、何か言うてはったんやと思うねん。何や一生懸命言うてはったんやけど、うちらには聞こえへんかったんや。」

わては岡本あつ子がそれだけ言うて急に黙り込んでしもうたんでまた泣いているんやないかと思うてあの子の顔を見たんですけど、泣いてしまへんでした。泣かんと眼がすわっていますのや。ギロギロッと眼が光っているんやない、トロッとしずまりかえってすわっているんですわ。わてはなんや背

筋が寒うなるような気がしましたんやけど、あとできいてみると、浜坂はんも同じような気分になりはったらしい。それに何やらさっきから小娘にひきまわされてるみたいな気にもなったので、わては、

「ま、そんなことは世の中にようあるこっちゃ。」

と話をたち切るようにして言うたんですけど、岡本あつ子はそんなわてのことばはまったく耳に入らんような顔して、わての顔をそのトロッとした眼で見ていますのや。わてもしょうないさかい黙って見返していましたんやけど、そのうち、この子かて、カナリヤをおいどの下に下敷きにしたことがあるんやないか、それで、三国ジュン子の話がこんなにこたえたんとちがうやろかと、ふうっと思うたんです。三国ジュン子のおいどは、着物の上からでもよう判りますけど、むっちり肥えて横幅の広いおいどや。べつに見たことあらしまへんけど、そんなことぐらいわてかてダテに年とってしまへん、判ります。岡本あつ子のおいども、発育のええ子で、背丈はあんまり高いことあらへんけど、肉づきがよくてまさに白ブタやから、やっぱし横幅の広いおいどでっせ。三国ジュン子のおいどのほうはあないに色の白い美人やさかい、わたしが昔松島でなじみやった娼妓みたいにまっ白なおいどですやろけど、岡本あつ子のはどうですやろ、やっぱし、かたちはわるいやろけど、色の白いおいどとちがいますか。とにかく、あないに肥えて横幅の広いおいどやったら、三国ジュン子のおいどにしたって岡本あつ子のおいどにしたって、カナリヤぐらい下敷きにしたって感じませんのやろ。いや、ほんまいうたら、三国ジュン子の話はみんな岡本あつ子のつくり話で、カナリヤを下敷きにしたのは岡本あつ子のおいどで、カナリヤはないてたんやけど岡本あつ子は知らんで、知らんとそれこそ三国ジュン子のヒット曲『夜雨の京極河原町』を歌っていて、それからヒョイと立ち上るとカナリヤが下に冷とう

なっていて、それでどうしようもなくなってしもうてわての学校にやって来て、ちょうど三国ジュン子がテレビで歌うているのを見て、あんなこと言い出したんやないやろか。

わてがそんなふうに考えたのは、その日の夜、うちへ帰って寝たあとのことで、夜中ふいにそんな考えが浮かんでとたんに目がさめたんですけど、そのとき、何や大きな声で叫んだような気がしてしょうあらへんのです。何でそんな気がしたかというと、誰も起きてくれへんかったからや。それがなんやえらく寂しいことで、たしかに世界中でただひとり取り残されたみたいな感じで、わてはしばらく気色がわるかった。そのうち、また眠ってしまいましたけど、わては不眠症なんかにかかったことない男で、ふつうは年をとってからでもよう眠るんです。朝かて、五時や六時に起きるなんてことはできしまへん。放っておかれたら、九時、十時まで眠ってます。ほんまでっせ。元子がいつも子供が真似をして困るいうて怒りよるんです。

それにしても、三国ジュン子、いや、岡本あつ子のおいどがカナリヤを下敷きにしたとき、血は出えへんかったんですのやろか。鋼材の下敷きになった男のときは、血がようけ流れて、あとはコンクリートの床の上に血だまりがでけてました。そんなこと、なかったんですやろか。

血が出ていたら、あのおいどにべっとりとついていたんとちがいますか。はだかで坐ったんやない、スカートはいていたんにちがいないから、セーラー服の下の紺のスカートについたんですやろ。それとも、女学生なんか電車のなかで坐るのを見てますと、スカートがシワになるのを気にしてか、まるでハカマをたくし上げるみたいにして坐りよる人が多いんやけど、あないにして坐ると、白いズロースにまっ赤に血がそのままつくんとちがいますやろか。岡本あつ子のズロースはもうずっとあとに

なって見る機会がありましたよってはっきり言えますんやけど、ピンクとか黒とか黄色とかそんな派手で色っぽいもんではあらへんかった。ナイロンの透き通るようなやつやのうて、木綿かガーゼのとにかくちょっとも透き通ったりせん白のズロースで、それ見てたらやっぱり女学生やな思いましてん。きょう日は、うちの嫁の元子みたいに四十にもなって、あんな恥かしい派手な色物の透き通るズロースはく時代ですやろ。それに岡本あつ子のズロースは新品いうもんやありませんでした。何べんも洗濯してもうええかげんほころびかけていよる上に、何日も替えんとはいているんでっしゃろか、何や薄汚れた白でしたけど、それでも、そこに血みたいな真赤なものがついてましたら白は白で、その白いところに真赤な血や、ドロッとして生まあたたかい真赤な血や。

三

鋼材の下敷きになって死んだ男は栗田忠義と言いましてん。なんでそんな四十年もまえに死んだ男の名前なんかおぼえてるんかというと、「忠義」という名前がなんやおかしかったからですねん。まだ若いくせに禿げていて、まんまるい顔にちんまり眼鼻がついているというような感じで、「忠義」という柄やあらしません。それ、「タダヨシ」と読むんとちがいます、「チュウギ」と読むんや、いうて、栗田と知り合いになるとみんなまずそう言われますんやった。

キップのいい男でした。腕もええけど、みんなの人気もあって、今度の工長は「チュウギ」はんやとみんないうてましたんやけど、アッという間に下敷きや、ほんまに造船所いうようなところはあぶないとこでっせ。

岡本が工長になれたんは、栗田が死んだからやという人がようけいました。岡本は腕はよかったけど、さっきも言いましたやろ、見栄っぱりでいばっていて、アタマのええことをハナにかけるような男やったからあんまり人気あらしまへん。上の人にはヘイコラして、下にはいばるいう、どこにでもいよる男で、くらがりで殴ったろかとか殴ったとか、そんなこと言うてる人がようけいました。そのうち、酔ったまぎれにじかに岡本に、栗田はんが死んであんたも工長になれてよかったなア、と言うた男が出て来よったんです。やにわに岡本はとびかかって行きましたな。とめる人がそばにいてよかったものの、おらへんかったら、どうなってたか判れしません。昔は造船所の職工いうたら気が荒かったもんやから、ケンカかてとことんまでやりよったもんですよって、そばに人がいてよかったと思うてますねん。

そやけど、そないに思う一方で、岡本はやっぱし本気でやる気はなかったようにも思いますねん。アタマのええ人やったから、そんな男をぶちのめしてそれで警察ザタになってせっかくの工長ちゅう地位を棒にふるいうようなことはせエへんかったんとちがいますか。ようアタマが働いてそれくらいの計算なら朝飯まえでした。そやよって、みんなからは、いやなやつや、ということになってましたけど。

戦争中、ちょっとボルトやナットをちょろまかして横流しやったことありますんや。そんなことぐらい、誰でもやってたことでっせ。べつにわてらだけやあらへん、会社のえらい人なんかになると、鋼材や鋼板まで横流ししよったんやから、わてらのやってたことは、何ですなア、まあ子供だましいうところでっしゃろな。そのときにもいちばんうまいことやっとったのは、わての見るところ、岡本

でんな。うまいこと立ちまわって、ピンハネまでしてよった。

そやけどわてには親切やった。三つ年下の同郷の後輩いうわけでっしゃろな、気味のわるいくらい親切で、よう世話してくれました。工長にはなれませんでしたけど、副工長いうのにしてもろたんは、岡本がえらい強いこと推薦してくれたからやということでした。岡本は自分でもそないに言いよったけど、ほかの人からも同じ話聞きましたよって、それはほんまの話やと思います。あれやこれやで、わての死んだつれあいの春子というのは人の悪口ばかり言うて暮してる女やったですけど、岡本についてだけは、あんた、あの人に足むけてねたらあかんで、といつも言いよりました。あんた、ひとつもありがたそうな顔してへんやないか、ともよく言うてましたな。もっとも岡本に負けず計算高い女でしたよって、わてらがいっしょに会社やめてしもうて、それっきり別れ別れになってしもうたあとでは、もう岡本のことなんかまるっきり忘れてしもうたふうで、わてが二年か三年に一度ぐらいどこかで岡本に会うたと言うても、あの人まだ生きてはんのかいな、と言うぎりやった。

「あんたのおじいちゃん、なかなかやり手やったんやで……」

とわてが言いかけると、岡本あつ子はいやにハキハキ口調でさえぎって、

「いやなやつやった言うてる人がいはりました。」

「誰が言うてはってん？」

「うちのお父さん。」

岡本あつ子は小使室のテレビのチャンネルを勝手にぐるぐるまわしながら顔色一つ変えんと言いよるんですけど、あれはどんなことでしたんやろか。やり手の人は人さまからいやなやつや、と思われ

るねん、と岡本のために言うてやると、
「そんでも、いやなやつはいやなやつや。」
と言いつづけよる。孫娘にまでそないに言われたらと思うとわては岡本が何やかわいそうになって、とにかく世の中には妬む人が多いよって、とか、あの人は口が下手でいばったように見えて損しとったとか、ゴチャゴチャ口上を並べたてると、岡本あつ子は突然クルリとふり返って、
「おじいちゃんはええ人やいうて、うちのおじいちゃん何べんも言うてはりましたで。」
「ええ人いうたら、つまり、アホウいうことやろ。」
「そんなことあらへん。ほんまにええ人や言うてはったんもん。」
世の中はキツネとタヌキのばかしあいみたいなもんや、この世の中でええ人はほとんどいよらへん、柏木のおじいちゃんがそのほとんどいよらへんええ人の一人や、そのなかでもピカ一や、ピカ一ちゅうのピカ一や、うちが死んだらな、柏木のおじいちゃんを自分の代りのように思うて、たよって行ったらええ。……
「そないにあんたのおじいちゃん言うてはったんか。」
「言うてはった。……言うて死にはった。」
まるで歌うように言いよるので何やら気恥しうなって、ま、世の中はそんなもんや、うしろからグサリとやられたり、それも親切にしてやった人にやられたりする、とそこまで言うたら、岡本あつ子がまたわての正面に立ちふさがるような感じでさえぎりよったんですがな。
「おじいちゃんはそんなことしはる人やあらへん。」

わては黙ってましたんや。そしたら、これでもかこれでもかというふうにくり返しますのや。
「そんなことしはる人やあらへん。」
「……」
「そんなことしはる人やあらへん。」
あれは念を押したというよりやっぱし皮肉やったかも知れまへんな。そやなかったら、あんなけったいな話をあとつづけてしよらへんかったんとちがいますか。なんでも、あの子は、小学校時代、あの子をえらくかわいがってくれた女の先生のカバンを近くのドブ川のなかにほうり込んでしもうたことがあるいうんです。その女の先生には親切にしてもろうたことはあっても、うらみに思うようなことは何一つあらへん、どうしてそんなことしたのか自分でもよう判らんのやけど、とにかく気がついてみると、女の先生のカバンをもってドブ川めがけて歩いていて、そのまま、ドブンや。あとで考えてみても理由はもう一つはっきりしませんのやけど、まあ、強いて理由をあげいうたら、親切にしてもろたよってとちがいますか、と言うて、うちとあんたは一つ穴のムジナや、かくしたってみな判るんやでというふうに、岡本あつ子はわての顔をじいっと見よるんですがな。そうしておいてから、また、くり返して言いよる。
「おじいちゃんはそんなことしはる人やあらへんけど。」

四

高い足場の上で、ひょいと、岡本の背中に手が伸びそうになったことがありますねん。何でやよう

判れしません。暑うて、お日さんがギラギラしとったら、頭がふらふらになってと言えまっしゃろけど、そんなことはあらへんかった。ええ秋晴れの日で、その足場の上から金剛山と高城山の二つがきれいに見えよって、岡本がまえを慣れた足どりで歩きながら、わざわざ一度ふり返って、見てみい、ええ眺めや、と言うたんをいまだにおぼえてます。

はっきり突きとばす気持になったやいうんやおまへん。手が勝手にひょいと動きそうになったんやな。それもほんの一瞬間のことや。やっぱし気配というものがありましたんやろか、岡本がまたふり返りよったんです。バナナが手に入ったんや。一本、茂二君にやるで。岡本の言うたそのことばはまだようおぼえてます。バナナは修理に入って来よった潜水艦の乗組員から岡本が内緒でもろたもんらしいですけど、それでえらい儲けよったいう話をあとから聞きました。わてには、そのころ次男の茂二が肺浸潤やって寝てましたんやけど、その子にやれというてタダでくれよった。しなびて黒うなってしまったバナナやったけど、バナナはバナナや。まあ宝石みたいなもんでっしゃろ。うちにもって帰ってやったら家中大さわぎになって、茂二ばかりに食べさせるのもなんやというわけで、みんなで分け合うて食べた。一人あて小指の先ほどやったけど、とにかくバナナや。春子がつくづく、岡本ハンには足むけて寝られへん、と言いましたで。春子ばかりやおません、わてかてほんまにそないに思うた。

足場の上でとっさにふりむいたけど、岡本はわてが突き落そうとしたことは知らずにすんだんですやろ。岡本が控室においておきよった特配のサケの罐詰五個がどこかへ消えてしまって大さわぎになったときも、岡本はわてにまるっきりうたがいをかけよらへんかった。ほんまを言うと、それかて

わてが持ち逃げしたんやけど、あれ、岡本はんがもう一ぺん特配もらおう思うて言いふらしてはることとちがいまっか、と耳うちしてまわったのもわてやった。

そやけど、岡本は勘のええ男やったさかい、みんな知っていて知らぬふりをしていたんとちがいますやろか。そんな気もしますねん。みんな知っていて、みんな岡本あつ子に教えて死んで行きよった。実際、岡本あつ子が、おじいちゃんは、ええ人や、と言うてわてを見るたびに、しょっちゅうやないですけど、ときどき、この子は、みんな知っていて言うとるのやないかとそんな気にもなりますねん。

五

恥かしい話ですけど、そのうち、朝がたフトンのなかで岡本あつ子のことを考えるようになりましてん。夜はわてはすぐ眠ってしまいますよって考えるひまなんかあらしません。朝は、さっきも言いましたけど、わては年寄りに似ぬ朝寝坊のほうやから、ぎりぎりの七時半までフトンのなかでウツラウツラしてますのや。日曜なんかそれが九時にも十時にもなって元子に叱られるんやけど、そないしてウツラウツラしながら岡本あつ子のことをあれこれ考えてみるいうわけですな。と言うたかて、あの子の顔かたちがはっきりわての眼のなかに出て来るいうのんではないんでっせ。もっとぼんやりしたもんやな。もっとぼんやりしてまるいもの、まんまるい、まるまるしたもんが出て来よって、それが岡本あつ子なんやな。岡本あつ子のもんいうことが判ってるんやな。眼で見ているいうより、からだで感じとってると言うたほうがよろし。メクラさんが何かものを見る、ものを考えるいうのはそんなふうなことやないでっしゃろか。まんまるいものには弾力があって、指でポンとはじくとしなやか

にはね返って来よる。あんまりすべすべはしていないし、白くもないんやけど、それでもそのまんまるは若い女子のまんまるやから、わてはフトンのなかでいつまでも相手にしているいうわけや。

いつか週刊誌見てたら、老人専用の秘密クラブがあるんやいうて出てましたけど、そういう話はほんまのことでっしゃろか。そこへ行くと、睡眠薬のませられて眠っているまっ裸かの処女が何人もいて、お好みの女子のからだに自由にさわることができるらしいですな。してはいかんことは女子とほんまに寝ることだけであとは何してもかまへん。まあ、そこへ行く年寄りはみんなわてみたいにもうアカンいう組らしいのやけど、会員制になっていよってちょっとやそっとのことで会員にしてくれしませんのや。いろんな人が入ってるらしいですで。大会社の社長はんもいれば歌舞伎のほうのえらいさんも文化勲章をもらうようなえらい作家はんも会員やそうやけど、わてもときどき、そんなクラブの会員になってみたいと思いますねん。ゼイタクなことは言いませんで。そんなクラブやったら、きれいな女子そろえていはるんやろけど、わては岡本あつ子でよろし。白ブタはんでよろし。あの子のまんまるを一日フトンのなかでさすってみたいと、そんなことばかり考えながらウツラウツラしてますねん。

現物のまんまるはいつでもセーラー服姿か、色のあせたカーディガンにスカートいういでたちのまんまるでしたけど、フトンのなかに出て来るまんまるは、はっきりは判らへんですけど、やっぱし、着物着ていました。わては岡本あつ子に会うたびに、今度は着物着てくるねんぞ、とたのんだんですけど、きょう日のことやから、なかなかそうは行きませんやろ。それでもいっぺんだけ、友達の誕生日のパーテーの帰りやいうて着物で来よったときがありました。化繊で見るからに安物の着物やった

し、帯はこのごろ売ってます誰でも結べるいうふれ込みのインチキ帯やったけど、それでも、わてみたいな年よりには着物の女子(おなご)いうのはよろしいもんでっしゃろ、岡本あつ子のその姿が眼について離れませんのや。フトンのなかまで入って来よる。

着物着て来よったときには何やうれしうなって、近くのスシ屋まで連れて行って、スシ食べさせてやったんです。盛りあわせやのうて、ちゃんとにぎってもろうて食べたんでっせ。あんたのおじいちゃんは「ひばりや」の女の人連れてよう桃谷駅前の「江戸前にぎり十円ずし」に行かはったらしいで、と言うと、そんなことまえから知ってた、そのことで、女の子にスシなんか食べさせて無駄づかいするいうて、ようお母ちゃんにケンカ売られてはったと岡本あつ子は笑い、好物やというタマゴ焼きを大きな口あけてどんどん入れて行きよったんやけど、さすがにまんまるの頬っぺただけあって、いくつでも入りますのや。呆れてしまいましたけど、タマゴ焼きをそんなふうにして頬ばる着物姿のあの子には、子供みたいに頬っぺたをぷうっとふくらましているというのに、へんに大人びた色気があって、わては食べるのをやめて黙って見ていて、おじいちゃん、どないしはったん、と言われたくらいでした。

「京都に連れてったろか。」

わては思わずそう言うてしまいました。岡本あつ子は、そんなとき、すぐ、うれしいわ、行きたい、なんて言いよりしまへん。まず、わざとぶっちょう面して黙ってますんやな。わてはしょうないよってもう一度くり返すいうわけや。

「今度の日曜、京都に連れてったろか。」

そないに二度ほど言うと、やっと、
「行ってもええ。」
と言いよる。わてはそないに言われると、べつに行ってもらわんでもええで、といつもどなり出しとうなるんやけど、岡本あつ子はわてのそんな気持の動きをよみとっとるのでっしゃろか、もうそのときにはぶっちょう面をやめてニンマリ笑っていますんのや。それでわても何にも言えんようになる。そんなカケヒキはちょっと心にくいもんでした。
京都へ行くいうたかて、はっきり決めていたことやないんです。ただその日の朝がた、今度の日曜は外出するいうて元子に言うてしもうてたんです。ことのおこりいうんは、元子が、今度の日曜日、妹の恵子の家にみんなして出かけるよって留守番おじいちゃんたのみまっさ、と言い出したからで、それをもうそないなことにもとからきまっているような押しつけがましい口ぶりで言いよったんです。元子はいつでもそうですけど、日曜日にどこかへ一家で出かけるとなると、留守番はおじいちゃんがやってくれるものとてんから決め込んでいよるんですな。それがまえまえからシャクにさわっていたんで、わては、今度の日曜日は留守番でけへんで、とはっきり言うてやりましたんです。何でや、と言いよるので、そないに言われたら、どこかへ行くいうて言わなしょうありませんやないか、学校の用事で行くとこあるんや、と出まかせを言うたんですが、さあ、そないになって来ると、どこぞへほんまに行かなあかしません。それで、わてのまえでタマゴ焼きを頬ばっている着物姿の岡本あつ子を見ているうちに、京都へ行ったろか、という気になりましてん。
京都には坂井いう男がいますねん。こいつにいっぺん会いに行ったろかいう気がまえからしてまし

たんや。坂井いうたら、京都でフトン屋していた男で、わてが知り合うたんは坂井が徴用されて造船所へやって来よったときですけど、わてとおない年やったもんやからわりと親しうしてました。顔色のわるい小さな男で、あんなやつに力仕事は無理ですわ。そやけど、岡本はそんなオッサンまでしごきよるんやな。日本は今何しとると思うとんのか、日本は今危急存亡のときである、われら産業戦士は……というようなことを大真面目で言いよって、徴用工のオッサンをビシビシ使いよるんや。そら、会社のえらいさんが言いはんねんやったら判りまっせ、そやけど、岡本が言うねんさかいこっちはプッと吹き出しとうなるのをこらえていたんですがな。それでも当人はしごく真面目で、まあそのときだけ、会社のえらいさんか、監督に来てはる海軍の吉原はんになった気でいよったんとちがいますか。あないなこと言いながら、ナットやボルトの横流しに精出してたんやから、人間ちゅうもんはいろんなことやるもんですわ。それでも、あないなお説教しはりながら、ミナミのなじみの芸者衆を挺身隊員にして会社に連れて来はったえらいさんほどのことはやってませんけどな。何とかいう駆逐艦がでけて内輪のお祝いが工場であったときにわてらもスルメとビール一本の特配にありついたんですけど、お酌してまわりよったんがえらくアカぬけしとりますねん。あれ何や、言うたら、おまはん、知らんかったんか、芸子はんがうちの会社に来てはりますねんやで、とこうですがな。モンペはいとるんやけど、やっぱしビールつぐ腰つき、手つきがちがいますねんな。その女子挺身隊員の芸子はんのほかに女の事務員もかり出されて来てよったんですが、そのうち、みんな、芸子はんの腰つき、手つきをまねし出しよって、えらい色っぽいことでした。

徴用工ではっきりおぼえてるのは坂井ともう一人、朝鮮人の金いう男ですわ。朝鮮人もようけ徴用

工で来ていて、「チョウセン、チョウセン」いうてバカにされて、「ニンニク組」いうてかげで呼ばれとったんですけど、金はその「ニンニク組」の班長はんですわ。金何とかいうたんでっしゃろけど、おぼえてしまへん。朝鮮人いうたらたいてい金か李か朴で、石投げたらそのうちの誰かに必ず当たるということですけど、「ニンニク組」にはたしかにようけ金さん、李さん、朴さんがいはりましたで。みんなほんまにニンニク食うとったんですやろな、金さんも韓さんも朴さんも臭うてかなわん。あれはええ薬やいうことで、朝鮮のお人が強いのはニンニクのせいやいう話きいたことありますけど、やっぱし、あの臭いはいやでんな。日本人の好みにはどうしてもあえへんのです。

みんなは「ニンニク組」は臭い言うていやがってましたけど、取り得は大力が多かったことで、力仕事で大いに助かりました。そこへもって来て、そのころ、こないな噂がありましたんや。造船所はまずまっさきに空襲にやられるはずやのに、ちょっとはしっこのところが爆弾でやられただけで助かった。それはどうしてや、「チョウセン」がようけいるからやないかということで、これやったら、もっと「チョウセン」の数ふやしたらええやないかとみんなで言うてましてん。この噂は、ほら、「チョウセン」がようけ住んでいる生野区はとうとう最後まで焼け残りましたやろ、そやよって、造船所のほうは六月の二回目の大空襲であらかた焼けてしまいよったけど、あながち、まるっきりのウソではなかったとわては今でも思うてますねん。いっそ、「チョウセン」の旗たてたらどうや、というこわいことまで言うてる人がいました。「チョウセン」の旗て何や、そんな旗あるんかというと、たしかにあると言います。日本人がそないに言いよるので、おまえどこからそんな話聞いて来たんや、憲兵にひっぱられてしまうぞと言うと、金にきいて来たんやと言います。金て誰や、「ニンニク組」の班

長はんか。そうや。

その金なら言い出しそうなことですわ。まず、あいつはやり手や。やり手やよって班長はんにまでなりよったんやけど、日本人なんか屁とも思うてへんとこがはじめからありました。と言うても日本人とケンカするのんやあらしまへんで。そんなケチくさいことはやりよらんです。日本人の言うことをきいて、何でもやってのけて、あいつがおらんと何にもことが片づかんいうぐらいにして、それで日本人を逆にふりまわすいうわけですな。岡本が「ニンニク組」に命令しても、「チョウセン」は、まあやりまっさ、というぐらいのことですわ。金が言うと、そこがちがいますねん。シャキッとしてみんな一生懸命やりよる。からだも大きいし度胸もあるし、岡本がかつげんようなものでもヒョイと肩にのせよるし、まあ、親分ですな。その親分のことやから、平気で「チョウセン」の旗、あの占い師みたいな旗ですかな、その旗のことを言い出しよったんかも知れまへん。

戦争が終ると、金はさすがに親分だけあってみごとなもんでっせ。あとで聞いたことなんやけど、岡本つかまえて、いろいろお世話していただいてかたじけなかった、これからは、わたしらの世の中になったんで、恩返しをしたい、困ることがあったら何でも言うて欲しい、とちゃんと岡本を上座にすえて言いよったいうんですがな。もうそのころには金は鶴橋の闇市の親分になっていよって、そのときにも、裏口営業していよった今里新地の焼け残りの料亭に岡本を招いて言うたそうでっせ。それで岡本は、もうこんな鍋や釜やお寺の釣鐘なんかつくっている会社にいてもしょうないと決心して、会社をやめて金のとこへ行きよったんです。わてもわてで、こっちは日本人やったけど、親類に天六の闇市で羽ぶりきかせてるのがいたのに年がいもなくまどわされてしもうてやめてしまいましたんや

けど、あとからなんでもうちょっと辛抱せエへんかったんやと何べんも思いました。

坂井の話をせなあきませんな。戦争終ってから坂井は京都へ帰ってまたフトン屋になったんですけど、もう二年ほどまえのことになりますやろか、もう十年このかた連絡のとだえていたその男から手紙が来ましてん。返事出さんと放りっぱなしにしてしもたんですが、けったいな手紙で、「貴方」いうのが「貴女」になっていたり、「です」が「ですの」になっていましたんやけど、きっと女の子に代筆させたんでっしゃろ。字かて下手で、岡本あつ子の字と大差ないよって、代筆したんは若い女子やとわては思いましたんやけど、そないしてよんでいると、そのうち、坂井のそばにはきっとまだその若い女子はんがいはるにちがいない、坂井が入ったいうお寺に二人して暮していはるにちがいないと思えて来たんですがな。その女子は、元子やわての娘らみたいにきつい女やおません。もっとやさしうて、老人の心を知った、いたわりのある女子はんや。そない思うてるうちに、わては自分が坂井になったみたいな気持になって、手紙もったまましばらくぼんやりしてました。

坂井はもうフトン屋は息子にゆずって、京都の北のほうにあるお寺の世話になっていると言いはりますんや。息子に家督をゆずってお寺に隠居するいうような話は今どき珍しい話で、そう言うからには家族と離れてその若い女子はんと暮しているいうわけでっしゃろが、手紙には、奥さんのことは何も書いてのうて、日本の造船業も世界一になって慶賀の至りで、というようなわてらとなんの関係もないようなことが長々と書いてありました。

今、坂井が住んでいるいう寺は、昔、座敷で斬りあいがあって、そのときの血しぶきの跡が柱や天井に残っていてそれで有名なお寺やというんですけど、そんな人のケンカのあとなど今さら見ても

しょうありませんやろ。それをわざわざ見物に行く人もあるいうことでわてなんかには解せんことやけど、もう一つ、その坂井の寺には面白いことがありましてん。手紙についでのことみたいにちょっと書いてありましたことですけど、明治天皇のてかけはんの墓があるいうんですがな。明治天皇のてかけはんいうたら十何人いはったんでっしゃろ、十何人のうちの七番目にあたる人――なんで七番目なんか判りまへんけど、とにかく、その人の墓があります言いますねん。

明治天皇にようけてかけはんがいはるいう話聞いたのは、わてがまだ小学生のときで、あとでシベリアで戦病死しよった二番目の兄貴が教えてくれましたんや。どこまでほんまの話か知りまへんけど、十何人のてかけはんが、毎日、お茶を眼の高さに捧げもって並びはる。そこを明治天皇が通りはって、今夜はこいつやと思いなさったてかけはんのお茶碗をとりなさる。そのてかけはんが、夜、フトンのなかで天子はんとええことしはるねん、と兄貴は教えてくれたんですけど、わてはまだ小学校へ上ったばかりでっしゃろ、そのええことしはるということの中身が判りまへんがな。何や、何や、と訊いて兄貴困らせたことおぼえてます。それでも、その話だけは今でもようおぼえてるとこみたら、よっぽどびっくりしたんでっしゃろ。天子はんにてかけがいるいう話なんてはじめて聞いたんやさかい、無理もありまへんけどな。

戦争中に、その話、うっかりうちでしたことありますねん。とたんに、まだ中学一年生やった茂二がえらいこと怒り出しよりましてな、お父ちゃんは「非国民」や、「非国民」やさかい殴ってええんや、いうてほんまに殴りかかって来よった。あと二年したらすぐ予科練へ行くいうとったんが、戦争すんでちょっとしたら、共産党へ入りよった。天皇陛下のために死なんやつは「非国民」やいうてたんが、

天皇が日本を滅したんや言いよるねんさかい、ややこしい話や。今は私立の高校の教師して、事務員やった女子（おなご）といっしょになって、もう三人目ができよるんとちがいますか。

岡本あつ子に坂井のことを話したあとで、明治天皇のてかけはんの墓の話して、てかけの多いことはなんにもわるいことあらへん、男のカイ性のしるしや、となんにも弁解せんでもええことをわざわざ言うと、あの子は、うちかて負けんとようけボーイ・フレンドつくったるねん、とえらく見当ちがいのことをいつもの舌足らずの甘えた声で言いよったもんですけど、あとで考えると、もうそのときにはいろんなややこしいことを始めていましたんやろ。

「その坂井の寺に行ってみたろ思うてんねん。てかけはんの墓のお寺や。」

わては坂井と明治天皇のてかけはんの墓の因縁話をしたあとでそんなふうにしめくくりをつけるように言い、岡本あつ子というような若い娘はんを連れて同じように若い女子（おなご）はんにかしずかれて暮しているにちがいない昔の友人に会うのもわるくない、えらい風流な話や、と柄にもないことを考えていましてん。

つづきは製品版でお読みください。